

持続可能な開発のための協働型プログラムの 開発と高校生による実践

中村 洋介 (公文国際学園中等部・高等部)

I. はじめに

持続可能な開発という考え方は、物質的な豊かさをもたらす現代社会の中で、自然資源の持続的利用とバランスのとれた環境と発展をめざした考え方として生まれた。現代の教育においても、このような持続可能な社会の構築をめざして、社会参画していく人間像を描いている（文部科学省 2010）。

国内では高度な経済発展の中で産業構造が変化し、第一次産業を基盤とした山間地域では過疎化や高齢化が進行した。山間地域の中には、65歳以上の高齢者が集落人口の半分を超え、協働活動の機能低下や社会的共同生活の維持に困難が生じ、消滅の可能性がある限界集落がみられる（大野 2005）。

このような集落の増加は、自治体の財政基盤の縮小だけでなく、地域の伝統文化の継承が不可能となり、自然と調和してきた人間活動が失われ、文化的な多様性が持続できなくなる恐れがある。

このような山間地域は、現地で自然や文化を学ぶだけでなく、課題を解決するうえでも、持続可能な社会づくりに主体的に参画する力を育むうえでも生きた教材となる。主体的に課題を解決していこうとする市民を育成する立場においては、教育活動の中で持続可能な社会の構築をめざすプログラムをつくっていききたい。本研究は、山間地域と勤務校および生徒がともに山間地域の持続可能な開発を考えて実践した研究である。山間地域でのプログラムが持続可能な社会をめざした実践的な学習教材として有効であることを明らかにしたい。

II. 本実践研究の背景

実践地域となる藤里町は、秋田県北部の白神山地の入口に位置し、農林業を主とした山村である。秋田県は65歳以上の高齢化率が全国1位で、面積の70%が過疎地域である。藤里町の2012年の高齢化率は39.7%で、人口の社会減少も自然減少も多い。とくに藤里町北部の集落は存続の瀬戸際に立たされている（山下 2012）。山村は、近世以前からマタギ、木地師、炭焼き、焼畑など伝統的な文化が存在していた（宮本 2011）。藤里町にもかつてのマタギ集落があり、秋田杉の林業が盛んであった。しかし、1960年代から過疎化が始まり、現在では限界集落とよばれるような地域もみられる。新潟県の山村ではダム開発で集落が移転し、伝統的な狩猟などの民俗文化が消滅した例がある（石川 2011）。

このような問題に対して最近では、山村集落の維持と経済的な振興に向けた取り組みが行われるようになった。財政状況が厳しい今日では、自治体の地域振興に充てる予算規模は小さい。しかし、後

退する地域経済を立て直す必要がある。たとえば、地域固有の自然資源や長い歴史の中で持続的に利用されてきた地域住民の知恵や技を都市消費者に共感を得て販売する考え方がある（小田切 2009）。このような考え方の一例として、市町村や地元 NPO が主体となって新たな設備を要しないありのままの地域を生かしたエコツーリズムが行われるようになった。エコツーリズムとは、自然環境を保全し、配慮しながら観光で楽しみ、その一方で観光地の地域社会や経済に良い影響を与えるツーリズムである（敷田・森重 2011）。自然環境の中には地域で脈々と培われてきた自然と人間のつながり（自然－人間系）も含まれる。なお旅行業界では、マスツーリズムの衰退と低迷する国内旅行の状況から、地域の魅力を生かした滞在型プログラムが始まっている（大社 2008）。

藤里町には世界自然遺産の白神山地が広がる。白神山地には原生的な生態系とそれが育む自然資源を伝統的に利用する文化が残っている（竹内・牧田 2008）。この自然－人間系としての生態系の豊かさはエコツーリズムを行ううえでの利点である。自然資源の管理と観光開発のバランスをとる必要からもエコツーリズムが求められている（渡辺ほか 2008）。さらに最近では、世界遺産の価値に気づき、保存しようとする態度や未来に伝承する義務があるという責任感を育てる世界遺産教育が行われている（田淵 2011）。この世界遺産教育と共通するのが ESD（持続可能な開発のための教育または持続発展教育）である。ESD は、大量生産、大量消費、大量廃棄に基礎を置く価値観や行動様式を生物多様性を確保しながら、持続可能な消費、生産パターンに転換し、人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、環境の尊重などを育てる教育である（中山ほか 2011）。この ESD は、地球的諸課題の解決をめざし、使命追求型の教育活動であり実践的な性格をもつ（生方ほか 2010）。

山間地域の自治体・住民の立場では集落の維持、地域振興に課題を抱え、旅行業の立場では地域に密着した観光活動が始まり、教育の立場では ESD など持続可能な開発を意識する市民の育成が求められている。この三者の意図が一致する考えがエコツーリズムであり、さらに過疎地の山村をフィールドにすることで伝統的景観や環境・文化の保全と地域振興、教育での効果が期待される。

III. 実践

勤務校では、高校 1、2 年生を対象にプロジェクトツアーという選択型の校外での総合学習を課している。筆者はこのコース担当者として 2011 年度に実践した。現地での教育プログラムは筆者と藤里町の担当者と協働で開発した。参加した生徒は留学生 1 名を含む高校 2 年生 12 名である。2011 年 10 月 11 日～14 日の藤里町でのエコツーリズム学習と事前事後の学習にわたる総合学習を行った。生徒は現地において自然や伝統的な生業を体験すると同時に、山間地域で起きている問題に気がつき、地域の「宝」を発見する探求型の学習である。さらに参加生徒は発見した地域の「宝」を再構成して、今後の町の事業として成り立つエコツーリズムを意識したプログラムの提案をめざす。

4 月から始まった事前学習は、過疎化が進む山間地になぜ人びとが住むのか（白水 2005）、過疎化・限界集落とはどのような問題か（小田切 2009）、地域振興の方法にはどのようなものがあるか（金子 2009）などを考えた。それを基礎に、先の 3 点を読んで要約したレポートを要約集としてまとめた。9 月にはエコツーリズムを専門とする海津ゆりえ文教大学准教授から、地域にとってかけがえのない

自然的、文化的価値のあるものを「宝」として発掘、再発見、再認識する作業について説明を受けた。地域の宝探しとその宝がエコツーリズムのプログラムとなることを学んだ（真板・比田井 2009）。

現地では、ありのままの生活文化を体験するために2泊を藤里町の民家に宿泊した。プログラムは、藤里町を代表する原生のブナ林でのガイドツアー、生業であった林業と炭焼きなどの体験、湧水を利用した棚田の見学など藤里町に広がる都市域にはない資源をプログラムに取り入れた（表1）。各ホームステイ先では、所有する森林でキノコ狩りを手伝ったり、川に仕掛けた簀でサケやイワナを採ったり、藤里のソバ粉で作ったケーキをご馳走になるなど、プログラムにはない体験もあった。なおホームステイ先には農業を営む家庭も含まれる。駒ヶ岳と岳岱自然教育林のガイドウォークでは、藤里町の山岳ガイドに白神山地の生態系や生物相について、紅葉したブナ林のもとで実物を手に取りながらの解説があった。林業体験は、国内林業の不振により放棄された杉林が目立つ中で、40m四方の秋田杉の人工林で地元の職人から間伐作業を教わった（写真1）。生徒1人あたり5本程度のスギを間伐し、伐採した跡のスギ林は光が差し込む健全な人工林へと変化した。間伐作業によって森林が安定し、持続的に利用可能な森林となる。町の有志の方からは地域特産のきりたんぼとだまっこ汁を教わった。これらのプログラムやホームステイ先での体験、会話などを通じて、参加生徒は藤里の地域資源となる宝探しを行い、現地のミーティングと事後学習で考えを深めていった。

参加生徒は、現地体験を通じてレポートを作成し、一次報告として藤里町に提案した。現在、宝探しを通じて得られた地域の宝を再構成し、プログラムの開発と提案をめざして活動を続けている。

表1 共同開発した現地学習プログラム

実施月日	プログラム
10月11日	○世界遺産センター藤里館（入村式・白神山地の生態系を事前学習） ○ホームステイ（ホームステイ先での体験・宿泊）
10月12日	○白神山地・駒ヶ岳のガイドウォーク（白神山地の原生自然を学習） ○岳岱自然教育林のガイドウォーク（ブナ林の見学・学習） ○世界遺産センター藤里館（見学・学習の振り返り） ○ホームステイ（ホームステイ先での体験・宿泊）
10月13日	○藤里町清水岱環境林（炭焼き体験・きりたんぼ作り・ブナの植樹） ○藤里町町有林（秋田スギの林業体験） ○ホテルゆとりあ藤里（3日間を振り返るミーティング・宿泊）
10月14日	○銚子の滝（散策） ○藤里町横倉集落の棚田（棚田所有者からのガイド・水源の見学） ○白神山水の館（湧水を使ったミネラルウォーター工場見学） ○大野岱牧場（町の特産品である羊牧場の見学・閉村式）



写真1 秋田杉の間伐プログラム

IV. 考察—実践の分析—

参加生徒に行った事前・事後のアンケートと藤里町でのエコツーリズムプログラムを通じて、生徒が作成した報告集から、生徒の考えや行動の変化を分析した。

参加生徒12名中の9名が藤里町を訪れて藤里町の印象が変わったという結果となった。その理由として、「観光に役立つものがある」「錆びれた山村ではなく豊かな田畑」といった明るいイメージへと変化していた。また過疎化や限界集落に対して、「若い人たちもいて頑張っている」などプログラムの後に明るい印象に変化した生徒が9名いた。高い満足度を示したプログラムは、ホームステイ（12名）、駒ヶ岳ガイドウォーク（11名）、林業体験（10名）、岳岱自然教育林ガイドウォーク（8名）、き

りたんぼ作り、湧水散策（7名）であった。とくにホームステイの満足度は高く、「薪ストーブ、敷地の広さ、秋田弁などの異文化体験」「おいしい新米」「家庭の温かさ」「近所との密接なつながり」などありのままの藤里町の生活文化を体験できた。とくに「地元の方との話」に満足した生徒が多く、また藤里町の方の人と人の絆の強さを感じた生徒も多く、人と人とのつながりが薄い社会になっている中で、ホームステイによって生徒が暮らす都市域では忘れられている人間味を感じていた。間伐作業では「教科書でしか知らなかった林業の実体」「木の固さと生命力を知れた」などがあげられた。参加生徒はプログラムを通じて、山間地域の自然的豊かさ、町の方々の精神的豊かさを感じ、都市域にはない豊かな資源が存在することに気づくことができたと考えられる。これらは、持続可能な開発を行っていくうえで、基礎となる藤里町の「宝」である。

V. おわりに

藤里町では豊かな自然—人間系など教科横断的で、さらに人々の温かいつながりから人間味あふれる総合学習が実践できた。目だった資源の少ないいわば目立たない山間地域には教育的価値が埋まっている。地域の宝探しは、宝を探して磨き、地域が誇るものを伝えて地域を興す一連の作業が必要である。参加生徒は、参加した立場から「宝を探す」ところまで活動した。藤里町に愛着を持った生徒が今後、宝を提案し藤里町と交流しながら地域興しとして協働できるように支援していきたい。自然や人々とのつながりをもった生活がある山間地域は、優れた教育のフィールドである。とくに都市域の私学は、郷土が異なる生徒が集まることから、学校が所在する地元と密着した学習が行いにくい環境にある。さらに生まれ育った地域に関係なく生徒が共有できる教育のフィールドとして優れた特性を持っている。またこの活動は地域振興と環境・文化の次世代への継承にもつながっている。

参考文献

- 石川 徹也 2011. 『山を忘れた日本人—山から始まる文化の衰退—』. 彩流社. (東京)
- 生方 秀紀・神田 房行・大森 亨 2010. 『ESD (持続可能な開発のための教育) をつくる—地域でひらく未来への教育—』. ミネルヴァ書房. (京都)
- 大社 充 2008. 『体験交流型ツーリズムの手法—地域資源を活かす着地型観光—』. 学芸出版社. (京都)
- 大野 晃 2005. 『山村環境社会学序説』. 農山漁村文化協会. (東京)
- 小田切徳美 2009. 『農山村再生—「限界集落」問題を越えて—』. 岩波書店. (東京)
- 金子 弘美 2009. 『田舎カーヒット・カネ・夢が集まる5つの法則—』. NHK出版. (東京)
- 敷田 麻美・森重 昌之 2011. 『地域資源を守っていかすエコツーリズム—人と自然の共生システム—』. 講談社. (東京)
- 白水 智 2005. 『知られざる日本—山村の語る歴史世界—』. 日本放送出版協会. (東京)
- 竹内 健悟・牧田 肇 2008. 教材としての白神山地. 地球環境. 13. 33-40.
- 田淵五十生 2011. 『世界遺産教育は可能か—ESDをめざして—』. 東山書房. (京都)
- 中山 修一・和田 文雄・湯浅 清治 2011. 『持続可能な社会と地理教育実践』. 古今書院. (東京)
- 真板 昭夫・比田井和子 2009. エコツーリズムにおける宝探し手法を用いた「持続的な観光地域づくりの発展モデル」の研究—二戸市の事例分析を軸として—. 京都嵯峨芸術大学紀要. 35. 35-46.
- 宮本 常一 2011. 『山に生きる人々』. 河出書房新社. (東京)
- 文部科学省 2010. 『高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』. 海文堂. (東京)
- 山下 祐介 2012. 『限界集落の真実—過疎の村は消えるのか?—』. 筑摩書房. (東京)
- 渡辺 悌二・海津ゆりえ・可知 直毅・寺崎 竜雄・野口 健・吉田 正人 2008. 観光の視点からみた世界自然遺産. 地球環境. 13. 123-132.